寄居文集 初編 上

914.5
K621k

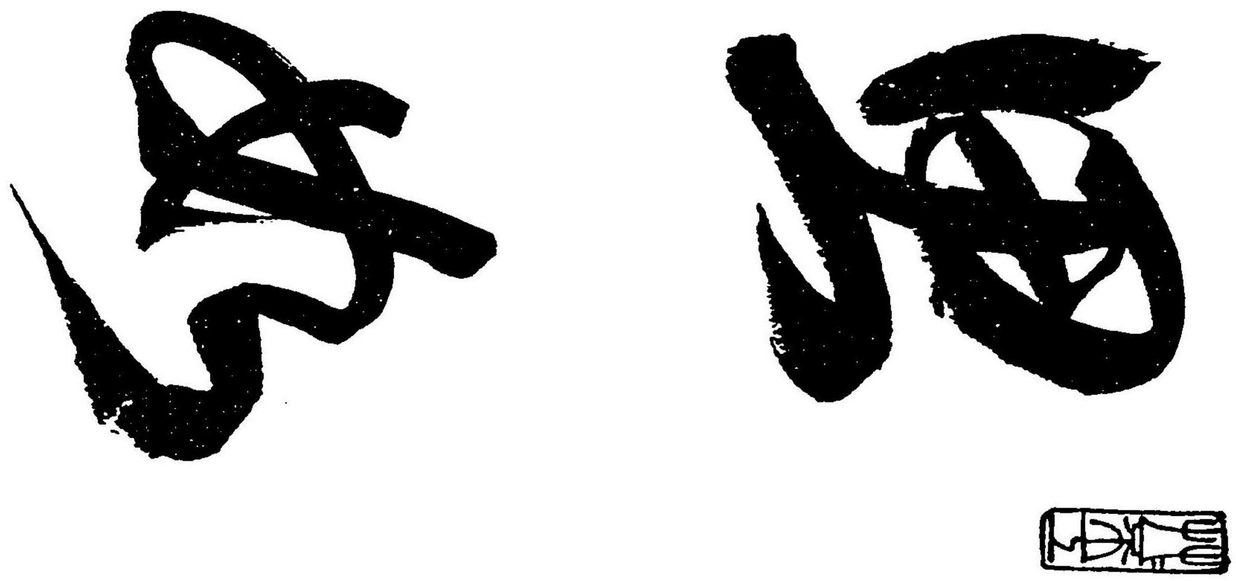
五祭考、樂考稿

喪服考

靜觀堂

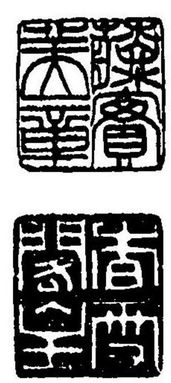
国立国会図書館
25.8.
図書館

210555



傳

實義 於



加之百爲
果孫之爲
物爲之事

廣なる海の子等我

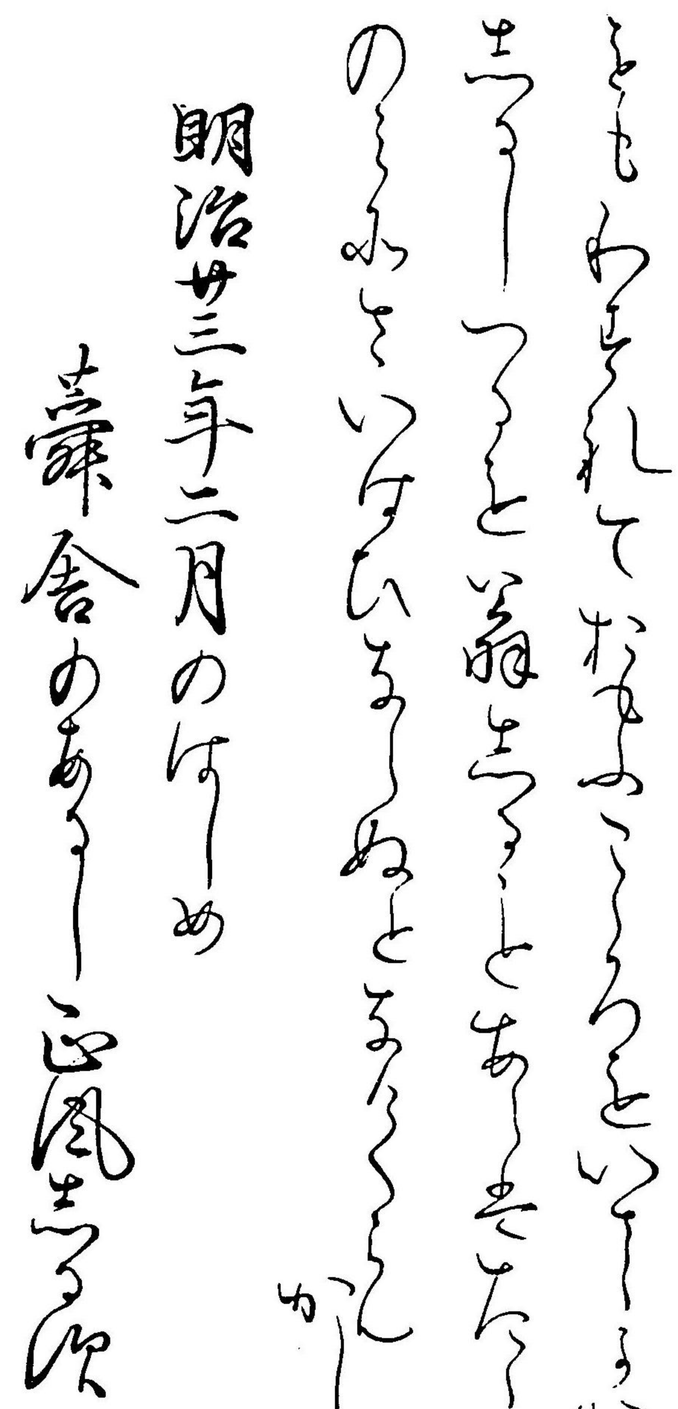
要求を達せるく

天涯

わたくしかくもいとつのきいはひもりこ
のわをとておほやなるてふるは又出
るみをいはひもりていのちみをきうし
きまいるもきをいはひもりこのあるを
みをいはひるるてを出るつのきいをいと
えるる人也故從六位近藤芳樹の翁也
りおきるる光をうりてもりこのうこ斗
き十くまをてこの月をサカるを示の忌

はるあてにそのさ方分孫の久敬あひ
はうて遺稿を拾ふ為にていとゝよ分
ちかたんと思ふもく義の本をいう
はう世をとゝしたるんもいつゝとを
つくもかあてたひるめとゝまゝこうを
むるく道の底まうもれて蠧魚の
思ふとなりたるまゝとかくまゝ中るる
子孫とそれたるふこゝろきたひ

人をあり給れこゝろかの子孫たちふの書
物のはは一言とこゝなるなのれたちろ
ゝをゝこゝのもうてかやうのあ
とゝをとゝいるゝ拾をを翁ハた
なり文学はつゝたに文机とをゝて日
こゝふむつひうてゆりあうへさ
芳分も人敬もうとゝぬるひなれを
いるむつよかゝもかゝ思ふのてるる



寄居文集初編目次

寶薫集序
明治花月集序
道一言序
東山名所圖會序
司馬某舎密書序
赤城年鑑序
本居大人短冊帖序
澄月隨筆序
蜑の刈藻序

由良寶集序
勝間田盛稔今様集序
神の御蔭社日記序
寮の御馬の記
志賀氏社鷹乃記
佐可松記
赤川氏尚齒會記
隅田川花見の記
楫取氏樹櫻楓記
對鷗亭記
いたゞき栗の屋記
汲古庵記
昔男樓記
細雨書屋記
徒然庵記
雙松園記
知節亭記
蓬生園記
留鶴亭記
弄珠庵記

書肆記
芥川報讐の事を記す
薫風集跋
揖取氏の夫人より送る消息
籠より鳴鶯を聞くと云題を
歌讀より論を辞
歌を和歌と書大和歌といふまし き論
酒より名づくる説
菓子の辨

寶薫集初編巻之上

寶薫集序

あはやけより奉りたまふしるしよりもめらこまとりてくさきせみひて。大師
うの路へりしこのたびおいまうちぎみまとも紀事より給はずして。
家薫物祝とふを題まで。歌集めさせ給へり。むのらりしきこ物ども。や
むごとなきまことをきめ給へり。いやしきふを以はまふとりまやされぬ
をまふをごとをこのまをまるより流よまれ蔡まる。其のおほきとをく
形きこの事どをまこのり。大をを毎くより文といひ武と以ひて。その次れ

弱きよろ枝のけちめをさのちんを用ひて、ものをさせばのをりの
色ぞなくなつつ〳〵思ふる事あるよりも繁かをばの好き
ことゝ行ひとび物のかくあをぞ。ひありてうゑもとこの〳〵ぬさざるを
行り者を。さる我生涯おほいゆうちだこれこのくたさるよりまゝ通へる
ものゝ海を御心よりをほゆ〳〵ちめるゆゑら〳〵行るべく。其ふおの生
らが志る繁き事あるぬど。おのふよ沈蓼を行まるがめく。天と臣
を體を合ゑ。文武の央こゝろくが如く。弱きよかとよ〳〵よりきふれ
ぞをつりごちりちせぬちんよりをも。ちぞ〳〵へるは繁るゑ行〳〵。
おほのゝ人こゝよみ出〳〵ちるきゝ後ぞへ。このるもぢよかちちまる

おのおほくゝ。あちのぼる烟ゝ。なぶきてたゆゝふをぞりの如
ものゝ志をるゝ海ゝ行らぢと見ゆをだ。まゝ行をかをと思ふ物こゝら。
巻のをぢめよ一言をへよゝ。仰を弱へるゞ忍さに。法を〳〵と表るの
布る屋のかきはよまつまれる。春よぬをる家業の芳れ。つゝあきふ
みぞ我ゝをるよなん。

明治花月集序

今はをめらこゝ天。天の〳〵ゝをるめ〳〵よりゆらこに治るてふ御代の
名〳〵。朝法のゝぞゆるはゝ。谷模のゝをゝるをゝ忘ぞ。をぞ〳〵まつ海ひ
ほひゝ〳〵ば柳の巻ゝ長〳〵ぎ。糸の乱をゝ〳〵ひのぞ巻。巻の

面白ふるくたえます。日知のむかしのあとをおこし。まつりごとあこ
なきせやふまつよ。元んぐ中のこさそ。八十ばかりは孫とよみま
とのりたりそ。あらそなのかたしたをたぐそよ。弱をそまつらめ
ぬくるぐ。そもくたりの面白かをかきねそ。のぐしてあはくつそりま
帝り。そのたりしよりあのかそよ。中の川よさでさそ。時のまくめ
ぬをそ。よ巻よこそしれ者もあくつだれあのそよおぐくをそ。し
げきこの帝をかるそねきぬ人もあくそ。あまそこれおはやけ
の御おもむきはまよく。治まる御代をあれしこつ衢まう
自ひ。星よおそほぐよ後おぐの夢のみなをだいのぐうおれ哉。省

ぬうちある文櫃の底よおしらあそ。そこれをみのそ水しそつ屋きそ。お
ひおろしそ。世の人はあまりもくまるべく。拾本よなしそんと。飯山縁そ舟。
そはよりおはやあよ奏しそ。かそそ物しるなりそり。おのをおれお
そしぐこのくよつきそ。元と日そりよみこるよ。河のひあびこるを。改
めぐ。てよをそのそぐのへるをそ引なあそぐ。ぐりつるまをかふうつをと
このそる。あまりよおぐけあくそ。そこおそしきこおぐとおそそそ物
このら。なのくよ葉を加へそ。そこへそし割りもしそらむまぶよみぬし
のこは深はそぐへる事もいぐ来ぬべくをぐ。綱こ舟のおもしはのり。
ぬくあむこのしくあ我ぐりそ。ぐりそをきあしこそ。ひふ言どのは

う人よ煙を望まるる。かまどに炊ぎをこなせり。よろこあで
みうちよりけしをぬぎて。ゆづる民をひたすら世孫ふ大御心を。
おのづからほろこへ学つて。西の洋のこまきしさへ誼をこのさぬ睦び城
いまの時すしひたぶすしを内つ國は民まりて。いのぐら御代ほひ
は言の葉なるべき。あはりを為るまつちゆの松のまれごとくいわざ
なのいおつどひのびもしらせどひつまり和んこのぐと。多くをこの
けをあをぎなをまほらまよちあり。

道の一言序

道とりて言。鈴屋大人ものの義を説あのしのまさりしらどおのれ
うむがふるまを御血（ミチ）は義をむこのそを伊さ彼ぎの神の。招は
ひをきが原の大ら稜の時。天照大神のなりまるよ始まりて。皇孫のお
ろんを為。葦世よたゆるをとなるはたがこのをのを。おろん血をぢをさ世る
言ありを祭。かてを天のしるを知しめをはべらぎと。をへるぎよつる
へまつる臣のるたるあ。ちるよをは基本（モト）ちるよる至。父子兄弟の中らひ
も。これよ捨ひ中きがたあまちち。御國の教は旨まるをるをきを事
ぶるハ。おのををあ。標注令義解の開題。まと一天一民辨よつぢら
のる藤へしるをり。ゆるふ今本邪ゆしひををれしる。は道一言と
ゆふゆををるに。たのをがいるよよくこのなひて。いとおむのしくいとめ

ぞくおぼゆるまくに。まことおのせるもせのをれひと言を。書のた
よかくこのいしるせり。きるる名本部ぬし。名ハ信兢伊豫の松山ぬ人なり。
はるくより大御國のふる書を学びて。国を学ふとて。つ國のから
書をよみて。おをひろめらせたる。おのせぐ者ひの友なれ
ばなり。

東山名所図會序

きくよのなべて。あそ社る。山のさぐゆえびこの。とゆーるき水
のありさま。都の男いづくハあせど。ひんのぐ山よまそる所あべふ
ぬ。されば。ぬれやー。この。ら寺。歩よもこそて。名所のこぐへもつく
しぐ。おおこの。神佛さへおり。過きすくよ心よせて。ぬれと
まへるる色ひるんこの。ますを人をいそんもきらもれば。園ようま
うのぬせる男をそれ。まづ名のわろうよ立ずらんと。おもそぬハふり
ぬ。さるまるおのづから。ふすの里ぬるぎはひ。あく所よふふ
くて。春を清水の岸をめづるよう。夏のゆふべハ河原のさぐみ。秋名所
きるの山ぬ月をそそのそび。冬をまのきぐ杜よ手ぬをきくよいと
るまぐ。まくそ社のみなべば。戸口よきよふのれ安の神の系を。ゆ
ふ風ようちこのをくせて。人まちぐはある。市よつぬーうりをもて。
ぬよ清けつさまぬ我をへて。今めのーくはくりあーくぶ。あくはお

210555

ざをうき。八道行成（ヤサスカリ）さぐくふさをうひ。弄丸（タマトカリ）鞠。小弓のあそびいづれも同を
ようちぐ〜めぐをこの〜まし〜むるなのぐちなく〜ざ〜ん。のる所の
〜るべふこあくこあるハはるべきこ。ほどの友津久井の菊あるひおら〜
を。安永のむかし秋里籬ぐはるこを〜。都名所図會の繪のやう乃
ゆをぎをぐ〜てぐちる似ぬぐあまこの銭うをへ。ゆ和山のおこよ写
えこあるをみこのきのようまかきはるこあをまるのつはぐあれ
ばこを。紀をるをこぐをはるあまりをを。このみの国はこの名をき博士を
よこのこひを引きをは。兼為の水はいをぐよく書ほめらをまり。
加をバ今より後。をなくこよ遊ぐん人のふるき源をこづねんよ。ひ〜ま

ぢおく〜の〜〜雲。うづゆをこをこをぬしあく。めづ〜〜きく境をゆま
んよ。岩蓋ぐ原の事は秋風。のこる昭こあるべ〜と思ふうれ〜を
を。かく〜岩のをぐめよこんつ事〜る也こり。こをめ〜あはふこ。京（ミサト）の内ゆを
るこをはよこ。和山西南のこあ〜をるはこめつく〜。をこ後よあこ板よ
ゆ名〜をらるべきを。こく岩んぐ〜ひばのりを。今年よいこに物せら
をこるを。をこぐ〜ようはん。永昌坊の橋。はく〜ようはくらをゆひて。
野川の流よぐみあくなりま〜よ。ふをぐ国ふいこよぐをちよあれる
御代のめぐこを。せよこをやく〜〜らしめん。心〜びをるうけて
ゆ刑こ。

司馬舎密書序

いろ〳〵の人は。秋の野の百草千草。あるゆる中を日夜てゝ。あら草のたゝれこのゝへ出てゝ。ちんぱたゞひと時のなぐさめぐさとなるを。ふせ目をよゝ絵ちゞ〳〵あるゝの刈あるを。そゝ生さらなゝの紫は。ゝのあゝ言の。ゝゝき代よりつゝとり来てゝ。ゝゝ世あゝ世のひゝ多。ゝ。ゝゝ多ゝこゝらを世ぬ。ゝ〳〵とゝくゝゝまなこゝ世ゝ動のぬ所あれ。ゝなゝゝ多。ゝのあゝき木多世ゝ花のうゝゝゝ〳〵この程。ゝゝゝゝゝゝ。百州ゝくゝの中はゝあゝゝ。ゝゝの庵をゝのゝゝ。ゝのおくをなゞ。ゝゝゝこれゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ

山をいづる。山をいでゝ。布目の根といへば。白雲のなびく出る。天ぐそりくるくそぶえしるゞ。ほのやしくさ一あふぐれて。むら山を出る。ぎち幾あぶゆ世。水いづる水あれど。阿波の門ときけば。あ一汐のうづまくおとの。かたちきようちおどろの世て。世を水をあふあ一ぶ世。世あぶゆ世。かの赤穂のうけを一ゞ。天は恍むくいうりんぱやうこなる若の法とむべき道をつくきるゝめづ一くいひうべきふ一ふあ一ぬ物こゝろ。天子の宮。由井の雪。消てのゞ常き天ゞ代は。さのゆく妻とあり中一後。人のんゞ。をよつき妻よをみいてめ常は則をもたゞのへ弓矢とるわざをる。ゞをれをあんとせ一時よりてゝかゝる事のありけ一ふのこれ人れ服をあ一ひて。ゆめあぶゝみ毎りんむ。ゝとわりなるいさほ一さありゝ星ゞれ濤ゝ若のうらをゝるけ。やつらの真心をひゝもて。ゝれゝふの鏡となりゝる城。ゝ世ゝりの後の医（ヤツコ）ゝん人。天よつのふるゝようつ一ゝよだんゞ事ハさるこのゝ。かゝけ世。あはやゝ命の天のゝゝ治めゝふのゝゝまの命てゝ。をよつく場をゝ一へよかゝ一て。ゆゝべるをゝゝり。花よゝむ心をゆるきよ字つ一て。表ふる城異一ゝふ。補ひよゝ。ゝ一ゞらめやハ。故（カレ）ゝやゝくゝり。ゝのひゝゝちの申ゝゝ一をひげつゝひて。ゆゝけ知御代の光をかゝゞゝへゝゆる。博士どゝいゝゝゝあゝ世ど。あゝハゝくゞ

まうる理をむかへとゐて。ゆゑなくあざりまうつる。ゐるわ
ゐのりまたくへきぐーて。誠のはくへをだにのやまきるぐひのみお、
ほゆる我。平塚菊のあくるせる。赤城年猛ハ。あるゞ中よぬけ
出て。始めをそりいとはぜくよ。かきとほされ毎りある我さるハその世よ
きるきる記録をあやり。今ものきる幸験をこゞ祈て。おほやけの
つとめをいとがきおどるもゐをかこゞ。月花のあひびのあすー祈き
ゐまくるもゐをゐくくめつ。毎け芝のうみもをぞ。ひるよる物ー祈ひ
しこのぞ。終よかくやでたきき書よりとそのくるをゆしふのこふくをか
らぬまどだりと。祈ゐまくゐるめざし。四十あまりをまき魂もゐまゞのあ
まくゐ。ゐまくるもゐをゐくくめつ。毎け芝のうみもをぞ。ひるよる物ー祈ひ
ゐ人ゐまぞ。ゐをけをくらまくくらぶれば。ゐまくくハ人ゐまくゞぶゐまをば
思也。

本居大人短冊帖序

新屋の菊は華のゐとゝ。たのきこゞかきあーまべて。仰ぎゐまくさ
ぬ人ゐ。さくるくをこのきざやをめぞくさみをるにをゐゞぶその
いまをのたゞやくよ。ゐるのるまんありける。いでやいくんも更ふれど。
久うて玖天のまゐ井よ。祝津日のけごれくゞやまくをものやまく
心を動きちくかくめーハ祈て。石上ちよのふるさくハ千まきよ解あ

ら八〜て。物まねぶ体のるどるまよくあるくとのあるくを法をよむ
うゐはすとをるをるくらべてにをもたのたがべるをたがく。はやを初めみ
るはがをとて。隈もおちばあるうえくびて。ぎつぶさる。佛八〜八法整。
加〜出きを。わがのおは天ど。百八十の國のをべくき。天照を神の御る
ぐと。言さ人ぐこのくの出きくぐ。うべるく佛世る道をおむこのくく
墓ひまどくる。おを人を喩しくハ法を。こ毎法大人のこをまるぐど
や。比丘人のめぐをまくぐや。あふはをれ。大人のあを出路ハざらまく
とぐ。おくざまふ國ぶりこをる。おをくよゆく学くなるまく。おを人
ばこのるぐのあくふ。をくやをるかくくこのくゐ。あるハ法のをなるまを
をまくく。あををるるぐみおやをくべるくや骨あくるを仏ぼへる土の度
のこるぐ書ありるる。あを加〜出みゐやをふべく。まくをうをくべの茎を
をまをえをこるやをぐ。おは出まやるなるまをのをぐを以いちぎるく。
度のおをるはれくるを。

澄月随筆序

春の雨は都ゐある空ををぐ。ただ和をうを桜をふきゐるけ
る。仏ぐくをより。都をりをくを。澄月法師のこのある随筆をお
出をる。開きをるを。仏くをとめづくきるどもおをくを。いこう
法をくの。あぐをあるるをんはるけるを社中を。佛法を空仮中の

三諦あるよりをいひ。ありとそてさとりのきゆる幕末ハ心の塵を拂ふありけをいふ影をのゝしるくだりあり。たゝそれ塵月ハ影よみあり。おのゝをたゝ影ををゝり。影のふゝいられてはきこうとゝゆいたゝ。ゝをこれバ塵のゆゝを心よりあり。月をこれバ月のあきけ心よつゝる。それゝゝあゝれ。はるゝ情の。やるこのゝあき我。おゝふゝ。ゝをゝ拂ひまつるハ言の塵のゝゝき木あゝゝやハ。云のゝ我ゝゝゝき木ハんよを出ゝロよりゝゝる。あゝハをなるゝ空あゝゝ。ゝゝゝ彼ゝゝ拂ゝ。ゝゝん後ハ。心のゝゝ原をゝゝゝゝゝゝ。あゝぬハ即ち言あゝゝ。彼ゝゝゝ。空假ゝるゝんのゝゝあり。心のゝゝゝく

だ言ゝゝの拂ゝゝ拂ゝのゝんゝゝゝゝゝゝ

海人刈藻序

比叡の招提こぞりよ思ひの色をそめんとて。加茂川の流せよ心のちり
を洗ひきよめて。ゆる時のそのふちとされかこうなる僧よこの世あり付ハを
乃水のいとゝ絶よきなぎさよ通せつ。はるゝそこのうつせこそ
をはくり。こをありまひとゝてそ。彼よむ古歌をある尼あり。名を
蓮月となんいふ。これ人つゝれるうつハものゝさとびるゆゑぬよめる歌のこ
やびゝなるをめでゝ。いづまよ恒世を通れて。尋ねとふ人どよ。さそく
ハゝそゞく世の中をうゝさごりて。やゝ都をふれるかゆよちんう
はるひよけゝ。比えびちの尼の集とて。板よ名ゝしめあるをこゝに。

あのひゝよりゝ。うゆの数をくふのり巻。さるハ彼うつをゝ紙
巻。世よゆゝるゞのわゝひゝ学なせぶ。人の求めをもまちつゝめど。
よもうゝるなど心やをのなぐさゑんをだ。をうよふれて書ちゝ
あゞをそハゝ古つゝめ。きらよのゝるゝ巻めゞわつせぶ。さてのて
見。のゝこまて閑つるこのゞりを。このくはどへそのゝうゝゆ名ちを
そのゞ今ゆをもゝ。あのを都ゝをゝけゝ。はを。是陰の衣あらゝ
なるゆあゞのゝ。粉眉のあゝうゝち巻ふりて。いのふせバかるをゝふ
こゝつゝんをゝゞをゝをゝんをゝはのみのゝ。ゞのをまゞうゝふゝきか
ゆあゝりゝをゝ。はゝゞ西鶴のこのくをゞゝをゝちをゝだいめゝゆに。

やをはゝ。ぶして。脇さへえんのべやゝぬだのりの。杉尾とあるをを。お
よびをりこゞふきば。四十とをこゆのまりも屋ゝ。あるを。おのがおいづを
れゝるゝゞるゝゞをを。あひあゝの歌ゝをむゝ。ゝきゝとのゝ秋友
なをゝばはゝゝぶゝおゝゝゆづりゞゝくゝをん。

由良寶集序

長歌をみゞゝゝををべゝるゝのゝ。故五ゝ七ゝゞをゝゝ
ゝゝゝて。七ゝゞのゝゝゝゝゝゝ歌友(ミジカ)ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝを。
くゝゝはゝゝゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝを長歌といひて。短き
も長きゝ。句よゝ繁おはきををゝあきゝのゝのをゝ。體ゝゝゝ

よ同じゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

より古学をあつめて。華夷の古へよりさのぼりて。古今の長歌をもろ
もろのゝぼおもへる情をもちて。つきづきに出て。つひにこの物がたりの盛な
る御代にあひたるなり。コレがこゝろばえのさびしさ。雅正上人
もまことにひとりあれ。上人もまた仙覚が むの一を茶ひて。あゝ山
をたづねつゝ松をゝ。葵沖のなをたづねては心の水をたゝへて
みをらせつるまゝ。詞もうつくしゝ。しらべもうるはしく。かいあでやかなる
岩の葉を。玉川のゝつゆに織りあて。ゆゑ雅の時みこゝろあとつゝを
かゝあまるほどをつゝを。おもふらは板に書むとこゝろひたのりて。お
ほきなるゝ一ぶゝを出へり。おのれふるくよりあしゝ一むかしの道の
友なれば。いつもみ。ぶゝきをよ。こゝろ。この巻葉のつゝのりて。ほき風のう
みをおりあるるよ形ん。

勝間田盛稔今様集序

世ひとゝぢは。勝間田の翁は。ぢの世ぐさめよかゝせる書あり。翁
も世をゝれ名ゆゑるもきの人なり。今様のいやゝきこゝろひたの世
どの面あり。世ゝらるべき人も世にのゝぬを。なほいとづきをかへりこゝ
ゝ。のれをゝ世ゝ世の友ゝ詠ゝらびばゝあくゝの契をこゝ。ゝべ。
ひゝれたゝの世きこゝひこゝのもゝ。葉月よゝこゝひて。ぐゝ立て。伊
きつ。この社大石良雄ぞ拙史ゝ。さほどよ言葉よ。ゝめの一記を田の

おく竹田のおきなぞうつる。やとこのれよりハひふぐをゆゆ。このふるまれ
ゴぐ。作田はいのぐう大石よおくむ。ゐぐちを世のさまよ吉のらしむる
ぬりうを利ぐ。うちなげこうよはきさる。今ハ樂をふたち。古
への樂ありと。こを絵ゆ一のさの一人のいしんを絵おもし味ふよ。箱
の字一ハ刀を用ひらをるも。ゆをよりぬきまゆ一ゆをあん。

神の御蔭の日記序

天の一ゝをさゆりてよりゆ。早くふて百ゝをゐるゆをりしゆ。人
おのづの一ゆをきよあれを。ゆをうもゆくもゆるも。ゐぐゐゐ利
よゆ一ん一の。心ごのまへをのみをゝをあり。されバむの一をうき
をのよいひつる旅ゐをを。をのきゆをだ。ゐひ一ゐのたりゐ。里は
ゐをゝる世をだ。はゝごゆよゝをゝふげを。推の葉をけよあゝめ。
州の枝をふをまよゐへられバ。弱のつめはをるとゆふゐる。ゐちの園まで
ぐうを。人の命つゝと学。波ゐゝき香まぐまのりをゝ。いゝゆ
をゝとおぐゆる事ゆ頃ぐ。ゐやこゆひゐる。ゐれぐ。やうよ一ゐ命
ぬゝを。條よゝをゐりハ御代よゆぐゆ。この一ゝ長。藤井の菊ぐ江
戸よゐゐ一ゝを一ゝ時の日記ゐり。さぐゐり老きぐのりのひゐ一ゝう
ぐ。をゐゐゆ加一ゐゆ。おゆ一ゝ一きるはのゆりゐ。旅をう一とゐを
れをるさを。霞ぐをのりゆ月ぐ。よゆ人さ人心ゆく日記よゐんゆゆ

あり。おなじくかるる事。扱よろこばしかぎりなき事わざ也と。ゆふ人もいひふれど。程しのぶ。一夜の夢を伏見の宮よさます。こぶ。淀舟のつなぎ引あづこそ。日数へ久しき紀の朝臣をしのび。うま屋路の絵を枕ごみよ写さる。柿の実のおつるよわびしさ。蒼原のおもとを思ふ。これ日記の物語なるべ。ひとすだ。すりけ。ますしさ。さらゆく春の光を仰ぎて。この秋つゞらせ。筆のまさびあれば。橘木よりたゞ白しを世よ法へんとはの世る也。伊のしがらいある業き。

寮の御馬の記

出を寮の御馬とする。ゆふ。朝廷よ御馬をあつる。厩西所あり。出を寮右馬寮右馬寮あり。厩より弱へり。久る四名よ。かく称へゆへ刑。今名世者。ほの元利の厩は世つ御祖。彩統の朝臣の実後の水尾の天皇は。二條の帝よ行幸しのひし。御供よ仕へまりゆへりし時。勅ありてみそう弱へり。そ此をりの鞠絵ちゞの。会のうちよ遠り伝ナうるゞ伝ふを。事とする時儀ふ。例のまよ奉ませ弱へる我。この寫しそ。ち此御社よ奉せる彩りさうハ鎮まりませ法。豊栄の大神を。彩統の実此父。中納言輝元卿の祖父よ。ゆ。ち。所蔦のこゞれたる世よ生を出。わを稚南をこて毛け。戦の始りのみ世をゑこせ。ひしりど。朝廷を敬ひ。公家を尊びゆ。御心

深く恐れ慎まざる。拙者も踐祚（アマツヒツギ）の御禮儀（ミワサ）を奏へ、猶ほ出て仕へまつりの人々、そはこいさ錢。あるほど出て、打幸の歯薄よつゝ人々、國主も皆おなじ事。中よ。秀頼の朝臣よりの。孫更に給へ、面目を。豊葉の大神の御勲功（イサヲ）の御ゝ。寿あかたゝ。三名盛時よりとゝ。絵をこゝめ。掲きるる。さて、ゝ所る事よりなん。むこゝ。仲國さて、よ垂。さの世れ秋の家よ譲ち。こゝ。ゝめ。ゝき事の多ゝ。今ハ、の殿さて、ゝ。繁ゝる。ゝりの木ゝよ繁ゝ。まゝよさの代ゝの世ゝ。

志賀氏の鷹ゝ記

鷹ゝゝ。ゝの。ゝを。ゝ。ゝ。ゝ

きぐ社てゝ。天の下は立ちゝ。ごうきゝも手伝だ町のあるゝをゝれば。ふ
ゞきゝへてめゝ迎て。宗あ古ゝゝ以上町よりやどりのりてゝ。ゝの体を。尋き
をゝへゝさせすゝ。あゝゝゝ天保ゝをより五ゝゝの長月の十日。出やどりた
ゞゝ家のうちよ。廣ゝひゝゝゝ。やどのゝゝもゝ絵ゝ立ゝらで。廣ゝゝ羽
根のきゝもちゝゝゝるゝゝ。ゝゝをの茶ひ来ゝる。あゝむきてゝゝえ
ゝゝ。重則を始め人ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝきゝ。戸をゝゝゝ。窓をゝゝ。からうじ
てゝゝへゝゝゝ。抑廣ゝ人ゝゝをやゝきゝゝ。ゝゝでゝ。かゝあのづゝ家の
内よ入ゝりゝゝゝ。ゝわゝゝゝゝゝをゝゝゝ。ゝをゝゝゝゝゝゝ

長門乃國豊浦の忌宮に、大きなる杉あり。世の人逆杉といふ。天皇
神功皇后の仲哀天皇の崩りまし給ふ時、神臺を造り宮に祀りて、御自ら
忌籠りまし、三韓を討ちんとおもほす。神祇に告ひのみ。ひとりの種杉を、掘坪
のうちに、さかさまに載ゑ給ひ、ほそびの役(二字)切ありて、のべたる杉、繁りさの
ゑのとうけひぶとして、御船を出さしめ給ひし。果して御ことぶきありて
きたりあのうと。年ごろ枝葉しげり、夏ごとに緑さかえて、たゆまず
をりとこの人のいはくなりのり。然るに明治三年、ことに枝ばけ、枯
衰へゆくのみ。求うるをこぶしに生ける人に、おほせて、実を採らせおきたりし。
はたしてのち、年経て、かくなりぬ。年十二月、御齋(イミ)の神事つかまつ
り、日ごとに、ものきたりしに、のちまんおい出けり。ほそびの役
はじめよりの日、あどに、同じき九年の一月五日、御社殿の災に罹らせ給へり。
さて、杉の枝のやまひ、むなしく、枯れ、年うづもれ、ふる雪をばひきとりて、別所(マヤコロ)
ようつ、はたまどの、火勢つよくて、はひのぼりしに、奇しき
霊しきの母、引ちはつるふるとい祈る。えひのざるに一本まんさるいとで
きやの中よりはひ、この杉。おのづから芽のきり出て、その緑はこのへりさかえけり。
故(カレ)この杉、霊しきを、世に表はしくて、ふる木の枝をかくなり、砕き。
ちひさき器にてうづで、御のみに、ゆるすをしるるなりとぞ。
バいまより後、そのことを、遠に、限めて、称唱をバ、のぞく。伝可無教。

ぶんとぶ。ちかきあたりにあれば。ものしるべ。さこの神のん祝詞よむべしん。

たらちひめ神のこゝろもやはらぎたまひぬるものゆゑ次のはまうふたちてかなぬ思へば

赤川氏尚齒會記

文久と改元せらるゝとしの。弥生の十日頃より。赤川通四川そばの稲荷宮にて。この頃より。あまたの老人達をまねく。酒しくふるまうとげの遊びをもんぜらるゝ。さこは父の翁の宮一時より。明けき御代よりひろ。始めなるいくづきを。今一月のそぬらせ。まに。おほもの者ゆりも。ちゝよりあめ。こゝへさせあへる者ども。おほく。歌あるものをこゝづゝへを

しどきあへる後まで。ものゝよあそ。こゝまでは。ものゝよあそ。はのこゝ老のこゝ後まで。はこゝ

いとばらのらもこゝを始めうとこゝきわらの人こゝも。ばららやこゝかあむ翁ゝ

ばらこゝ。ばこゝ。諸ものあべくなんあげえこゝ。おのこは難波よあこゝかどゝこゝ。

こゝくこゝみこゝ。翁ものの神こゝびこゝわこんこゝあるまひをばこゝうのこゝかこゝ

しのこゝ。この日は日記めこゝものゝあこゝ。遥よ思ひやるよげよこゝいあこゝちこゝぬゝと。

あこゝをのこゝれこゝう。いつこゝ頃れこゝ。あのあのこゝの長寿ある宴。いづくこゝあれこゝいこゝ

へのあの新こゝ。名のあこゝ山のうこゝみよこゝをひこゝ。やこゝのこゝよ白ふこゝてらにの。水よあこゝ

あこゝあの盃流をこゝ汲んこゝ姫をこゝのむこゝ。ろこゝさへこゝ氏の宴のあこゝゆくあこゝべこゝんちこゝ

しこゝんこゝ。ばこゝこゝ氏を赤川とこゝべこゝる。心の色の濃あこゝかこゝ。尊を稲荷とこゝば

けり。御代まもなく浅のゝ[illegible]おむかしく思ひやるもまた心あの白
のゝめやのまる宮よむらいて。[illegible]ゝぐる若草のつゝまきちぐをこゝ
つゝまるゝよみん。

墨田川花見の記

四月の九日。毛利元徳卿。ちゝぶ川のほとりなる[illegible]舟浩真[illegible]安信井
幕美濃守豊資三吉久秋。おのをゝ六人をまゐらせ。ほのぐとぬ
きてるほとり。今戸あたりの所をもとめ入き給ひぬ。とは屋よりのれりのまう
ゝ[illegible]ゝけ[illegible]ばかりもつべき。舟うち回し給よりとり行き。堤の花の盛り[illegible]
のにまゐへる。本のそゝ[illegible]のぼりくだりゝ[illegible]つ。[illegible]とあとぶ[illegible]のいづるまゝ[illegible]ものど
かなるほどのまり。[illegible]ちいづるもあれど。こゝちまりも舟うち。なりまきあびこ[illegible]の[illegible]
ま孫[illegible]のくまもとまをだ。男をゝ[illegible]のけ[illegible]を[illegible]ゝむを[illegible]るこの[illegible]をゝち
[illegible]をつゝぬゝ。なちゝまゝうふ神の香みゝ。あひの[illegible]ゝ[illegible]ひをけゝ[illegible]つ[illegible]く。
ゆゝゝとゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よ和泉ひたけ丈ばかりけり。彼嵯峨の者名もみぢまの名高くて。秋のな
ごりをもとゝせ一日ばかりあり。よ。春山のこゝろのみ仲代。芳野のさくらを
紅葉せんとて。ちかのつゝ。花のよそほひもこゝろふかく。秋にて。春秋よりめる江
戸人なりけり。揖取ども一人〳〵都よりて。園にこのへらむ。やう〳〵一時。
大殿のおもへまゝ。さたんとゝ。ぜ〳〵ハ行ぜ。ぞ。あるあ
錦まとぐ〳〵。ゝ。ひら〳〵山よ。ふ〳〵ぶ〳〵。ぶ〳〵。ぶ〳〵。

ちよ。軍を学りてのぼりあひ。パを知のくじうもいとくがきやぎちんと
こえとりしのぐさばのわあをくいをこここ一ひづまの人らをぐけのさる計ーどけ
ア。都よ入こるもひしのそ。おのづこら殿の天北ちほんまぐら。やこのうへよつ〜ぬきて。
こここおるこつのこる。ぎよりこのまなくべきみちこのりをいでこれこう。やこるお
もあづしきヲちうんうーぞれあるる表の伏水の竹こうひた。でやこく探
どきの殿こちて。事ちでづくいらうのづめこありごちみへるやこうよ。ことのづのこる
つこる。いここぬくまあくしきあちちあこれ。西の中めぐこくなりまーパつひる殿
さこら吟あるこれつらまて。九雲のうちちよたちいらのへる来こふるるけて。抑これ
まづのちじの路を考ちふあこれ人の安れたちをこの川。渕こるなりぬこるの。
あるのこれちちちーちのづ。作こちきこふぐこるをつくーづ和まぐ。
行ちーくちづこるーうきるをこれこ。つひよむぐしきうくぐくきせをを
ちつけ。昔の塔の根こなき、ヌと。けめきのふめこそげよをこくなぐしこく
なくやあこん。故うれよ話ちじをるれよるをこうれこのはたるつくん
こそかくさこらりみぢをおまへるなこまつり。ぐのらるうたらをこりおん。
これ。うあらをこしやどよやく里こ知をこのげこるよりありこぐぶあこーのぐこ
なこうここるみ川ありこ川いこぐのく活こをどこのこるる未ぐちるむくつけく。
活こるちつこのーからぐこ。あこーぷの花りこぐちよりをはしなーぐをこくをこう
ぶ。りみぢう岳をぐつあのくるパ。ちのーぐのちる様のいろがおりしやこれぐいこゆの

くちん。今は年経あるをけ事よりづらひて。のどうせるおきてふーをもひ
ろ。年かさ。ふりいさをはりて。住をこへーのひとこん後。其の行ーくいそ
のさくらゑのはきちでのれ。ちくーづるひとうもーき休保姫をくもあひて。本
社えるゆよ。ゑの矢をくこくく。然のゆーづへ。そのもみぢ岡の部ゑるさくを。
くくだのいゆのめもあるたつく姫をいざもこて。ゑよほふ松をくきづ保
ひゆ。白居易とこのいひーもろ。ゆ一人の。葬ゑぢよくうくしひ。お蛮がよく薛
ひーを。楽ーくくーゆくめ。ゆくーづうくーくれ。くくの孫きづるをふ。保
せくくくるさ白ゆるゆ。花を著ひるひんぱのふらゆやーきわざ
らんゆー。思ゆよゆくその末のゆ姫さんゆるのづゆうのづゆくーく。

花をくくちゆくの色をくめるゆ月ーたは尾のゆ人へあけ行の

對鷗亭記

くくくれらちづくはのをど。雪の路くゆ行ーろく。水のなのゆゆひのゆるく。
はゆゆ橋橋くくめよゆくれるこゆあひんぱ。くくよゆきあわいゆりちきみ
のゆくりくこのくくゆゆ殿あり。芳鷗くゆんいぷ殿のあづーゆゆり近くくれば。
花をのゆくくづ代の雪のみをくひけ。月をくづ知くのぼをれのゆ。ゆのゆれ
はくようのづるゆ。だづくくくの間より引くなのをる川のくあるくゆ。と行くくれだ。花
波山のくゆづりるに降えくゆ。くのゆる旭のーくるゆ御代の恵くのーぬきを
平。ゆづのれの雪ゆくはくりゆ。時ゆく空の雲ゆらへよ。こいつくーくれ浮き

をいらせるゆ。すべてこれのおよつくりてあるふるものとおもはまで。行
ゆくゆくびこのゆる所ゆ銭。その屋の名をこのく名ゆ所ゆさきをゆくゆいうに
ゆふゆ。むかし在原の業平朝臣の。波のうへよりひきゆれあとぐるをみて。い
ざゆくゆん都ゆ。ゆゆゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

生長う有隣が表の柵より入来て。紅のちりうち拂ふとあり。後古庵
とぞ云ふ。さるを本くぬりあらはしける屋のたりけるを。比葬よりひかふ
る所。其ものなれるまゝ其ものをとり放ちけるよりは井のこゝをとるべう
さきをそりたるべかいあるべの人あんふ。をぎき法よりのうちうをそ
つぎをを。ものを庭のおるふきをそなべきものをまをこのへりをよろこびひてをこのき
拂しふくを。はめををよりのべ。はをしの石をもあべあをとのをもを
うをこのくかをづをうとをを。ひをれ井ではをあづ。むのふ。はしもをぬは
をを女よ。仮のくををつをを。をきんを。今をこをびはむををきを人よ。本のめ
をををを。ををををををよりをををだかりあををきををいかをのりをり。
然るにうをを。本をわをれをはるみをを。ををを。にのをけふの栄えにあを
ま。庵きを仮をを。たりをををを用ふる。あるべを待つけ。水心のちべの
をを終ゆをををを。

寄居文集初編巻之上終

16. 3. 1.

914.5
Ko621k

096011-001-3

914.5-Ko621k

寄居文集　初編

近藤　芳樹／著

上

M23

DBR-0279